特選　「私の地図――みち無きみちを歩いてゆくこと」

私の地図はぐちゃぐちゃだった。いくつもの線が節操無く好き勝手に走り回っていて、綺麗な紙面は真っ黒く汚れていた。

迷走を始めたのはいつ頃のことだったのか、今ではもう思い出せない。いくつかきっかけに心当たりはあるものの、それぞれの時にはもう自分自身を見失っていたような気がする。

ともかく何もかもがうまくいかない時期があった。物語を書いても全く筆が進まない、面白く感じない。歌をうたっても声が思い通りに出ない、遊びに外へ出掛けても楽しめない、娯楽のはずのゲームや漫画が現実を突きつけてくる。息をすることすら億劫で仕方ない毎日。そうして乱れた私の日常は標識を失くして曲がりくねった。

どの道がどこへ向かっているのか見当のつかないまま歩いて、気がつけば元の場所に戻ってきている。最初は狂った何かをどうにか正常に戻そうと手当たり次第に道を辿っていたが、いくら行っても出口は見つからず、そのうちさまようことに疲れ果て、私は歩みを止めた。

秩序を失くした道の群れに囲まれて、膝を抱えてしゃがみ込む。周りから押しつけられる励ましの声が鬱陶しくて、心を抉られるような雑音に耳を塞いだ。受け入れられるものなんて何も無く、ただうずくまって、鉛玉を呑み込む心地で日々をやり過ごした。

私は独りぼっちになってしまったのだ。

いや、正しくは、ようやく独りで世界に出てゆく時が来た、とも言えるかもしれない。

それまでの私は誰かに頼ってばかりだった。辛いことがあれば親に助けを求めるか、あるいは何も言わずに逃げる。自分にとって都合の悪いものから目を逸らして、進むべきだった道を塗り潰し、書き直した。だから私の地図はたくさんの線が入り組んで迷路のようになってしまっていたのだ。

どんなに願ったって後戻りはもうできない。再び歩き出すためには、これまで見て見ぬふりをしてきたものと向き合い、自分の意志で納得し、乗り越えてゆかなきゃならない。誰かの支えに縋るのではなく、私ひとりで。そのことに気が付いた。

正直に打ち明ければただの泥沼だ。嫌で避けてきたものと対面しなければならないなんて、耳と目を覆ってひたすら耐え続けていた時より何倍も辛い。けれどこうやって自分自身の「これまで」を知ろうとしなければ、また同じことを繰り返すだろうし、前にも進め

ないのだ。

長い時間をかけた。いつか必ず抜け出せるとか、そんな希望的観測なんて抱けないぐらい、私は私を傷つけながら手探りで暗闇の中にあるモノを選別してゆく。今もまだその作業は終わっていないが、ようやく黒く汚れた先の白に伸びようとする道が浮かび上がってきている。

ゴールは見えない。だがきっと、この道が私にとって正しく歩むべき未知なのだと思う。